

心理系科目におけるアクティブ・ラーニング (AL) の実践 —異文化トレーニング手法を用いた試み—

中川典子 (流通科学大学)

キーワード: アクティブ・ラーニング (AL), カルチャル・アシミレーター (CA),
ジェネリックスキル (汎用的技能)

問題と目的

今日の大学教育では一部の研究大学を除き、知識基盤社会をたくましく生き抜くためのジェネリックスキル (汎用的技能) の習得に焦点が移り、広義のキャリア教育が求められるようになった。AL 型授業における学習パラダイムは認知プロセスの外化をとるような能動的な学習であり、「学習は学生中心」「学習は生み出すこと」「知識は構成され、創造され、獲得されるもの」といった特徴を持つ。異文化コミュニケーション能力を醸成することを目的とする異文化コミュニケーショントレーニングは、その主体がトレーニングの実施者にあるのではなく、あくまで参加者の主体的な学習活動にあることから、アクティブ・ラーニングの一つと見なすことができる。本稿では、異文化コミュニケーション能力を醸成することを目的とした異文化トレーニングの手法を用いて筆者が実践した授業活動を報告するとともに、その活動が受講生に与えた教育的効果について検討する。

方 法

調査対象者

調査対象者は、関西圏にある A 大学外国語学部で 2016 年度から 2019 年度の後期に筆者が担当した「文化史 F-コミュニケーション心理学 (副題) -」を受講した 20 の専攻語学科に所属する 111 名の学生である。

調査手続きと分析法

(1) 受講生は隔週で授業の約 40 分間を使い、前週に出されたカルチャル・アシミレーター (CA) の課題についてグループ・ディスカッションを行った。(2) 受講生は定期レポート試験の課題の一つとして、各自の専攻語文化圏に関する対人コミュニケーション上の問題を扱った独自の CA を作成した。同時に、CA 作成に際して感じたこと、および、授業中のグループ・ディスカッションで得た学びについて執筆するよう求められた。執筆内容は KJ 法により分析を行った。

結果と考察

CA の設定舞台に関して、日本の設定は 60 件、海外の設定は 51 件であった。想定した設定場面として「学校」関連が最多であり、作成の際に着目した ICC の概念は「文化的価値観」が最多であった。Figure 1 は「CA 作成に関する考察と感想」における結果である。ここでは、「専攻語文化圏に関する学びの機会」、「感情的フィードバック」、「異文化間コミュニケーションの実践」に関する回答が顕著に見られた。Figure 2 は「グループ・ディスカッションによる

び」における結果である。「異文化理解への思い」、「多様性に対する気づき」、「自文化と自己への振り返り」に関する回答が顕著に見られた。

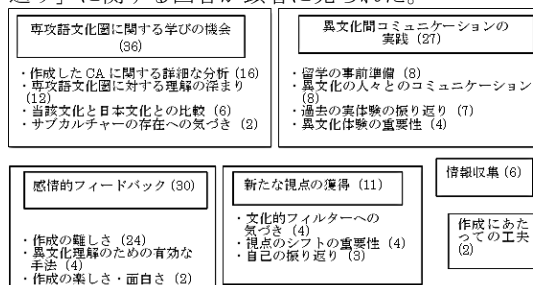


Figure 1 CA 作成に関する考察と感想
(N = 112 件)

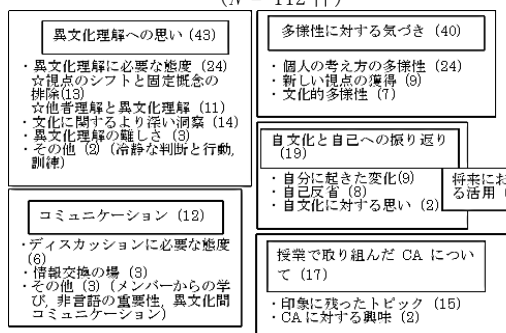


Figure 2 グループ・ディスカッションによる
学び (N = 140 件)

今回の実践は四半世紀以上前にチックリングとガムソン (1987) が提唱した「優れた授業実践のための 7 つの原理」であるところの①「教員と学生のコンタクト」②「学生間の協働」③「能動的な学習」④「迅速なフィードバック」⑤「学習時間の確保」⑥「学生への期待」⑦「多様な才能と学習方法の尊重」に基づいていた。デューイが提唱した「問題解決のための 5 つの思考方法 (①問題の定義, ②問題の分析, ③問題解決策の提案, ④有効な解決策の選択, ⑤有効な解決策の実行)」は異文化間の問題解決にも応用可能であり、授業における CA 活用の際に共有できる考え方である。分析の結果得た 12 のカテゴリーと 29 の下位概念には、自分自身や、CA の登場人物、そして、クラスメートに対する様々な気づきや感情 (驚き, 関心, 興味) が受講生にもたらされたことが示唆されており、今回の授業実践が認知的側面に限らず、情動的側面においても少なからぬ教育的効果をもたらしたことが明らかになった。